平成三十年三月一日発行
昭和二十二年一月二十四日（第三種郵便物認可）
明治二十八年創刊 毎月一日・十五日発行

Good News for Japan ときのこえ

満ち満ちた喜び

ナイジェル・ラスコム

笑顔と笑い声のたえないフィジーの島々で（昼食の準備をする救世軍の人々）

ここ日本から地球の反対側にある、フィジーの国で学んだことの中の一つに、「満足」があります。

フィジーは、「フレンドリーな島々」と言われ、どの島の人々も笑顔を欠かさず、だれにでも、たとえ見知らぬ人にでも助けを与えようとします。ところが、そんなフィジーの人々は、ほとんど物を持っていない生活をしているのです。

二〇〇六年に起きた最後のクーデター以来、多くの人々は家賃を払う余裕がないため、不法状態での住まいで暮らしています。仕事のない人も多く、あったとしてもとても低い賃金で働いているのです。農業に従事している人であっても自給自足が精一杯の状態です。

このように非常につましい生活をしているにもかかわらず、人々は自分の持ち物にとても大らかです。フィジーの人々は、日曜日に教会に行っている人が多く、ほとんど現金を持っていないような生活の中で、神様にできる限りのものを献げます。お金だけでなく、野菜や果物を献げることもあります。教会で食事を共にする際には、それらが大いに用いられ、皆お腹一杯食べることができます。

フィジーの人々は、自分たちの状況を嘆くことはありません。人生を実に楽しんでいるのです。いつでも面白いことを見いだす人々です。私たちは、笑い声を耳にしないことはありません。そして、常に笑顔をたたえています。たとえ何も持っていなくても、人々は満足しているのです。

フィジーの人々は、私に使徒パウロの書いた言葉を思い出させました。コリントの人人に宛てた手紙で、パウロはマケドニアのクリスチャンについてこのように書いています。

「…その満ち満ちた喜びと極度の貧しさがあふれ出て、人に惜しまず施す豊かさとなった…。」（コリントの信徒への手紙二8章2節）

この表現にあるように、マケドニアのクリスチャンは、単に貧しいのではなく、極度に貧しい中にありました。そして、貧しいだけでなく、先ほどの言葉の前には、「彼らは、苦しみによる激しい試練を受けていた…」とあります。その苦しみが何だったのかをパウロは記していませんが、マケドニアの人々が、他の人々に施すような状況ではないことは容易に想像できます。それどころか、他の人からの助けが必要だったのです。少なくとも、施すことができない言い訳もできました。にもかかわらず、彼らは、与えたのでした。それも、惜しまず、喜んで与えたのです。

フィジーで出会った救世軍の人々も彼らのようでした。自分自身が助けを必要としている中にもかかわらず、何も与えるものがない、と言い訳もせず、彼らは与えたのです。

二〇一六年二月、フィジーは、カテゴリー5の規模の強大なサイクロンに直撃されました。私は、かつてないほどの被害を受けた地域の復旧を支援するためにフィジーに一カ月滞在しました。本当にひどい状況でした。

ところが、それから数カ月後のことです。救世軍で毎年おこなっている「克己週間募金」に、フィジーの救世軍の人々は、惜しまず、しかも、いつも以上に献げたとの報告を受けました。

聖書が教えていることは、私たちが、私たちの置かれている状況に満足できること、そして、どんな中にあっても寛大でいられる、ということです。私は、そのように生きるための「鍵」を次の言葉に見いだします。

「彼らはまず主に…自分自身を献げたので…」（コリントの信徒への手紙二8章5節）

この「鍵」は、この世界のすべてに通じる鍵です。満足する生き方への鍵、喜びへの鍵なのです。

聖書の示す鍵、それは、まず私たち自身のすべてを神様に献げること、です。

あなたも、どんな中にあっても満ち満ちた喜びに生きることができますよう、お祈りいたします。

（救世軍士官〔伝道者〕）

謹んで被災された方々にお見舞いを申し上げます。一日も早い心の平安の回復と、被災地の復興をお祈り申し上げます。

〈信仰の体験談〉

こぼれるような笑顔に惹かれて ～私の証し～

日野多香子

日野多香子（ひの たかこ）さん
プロフィール

児童文学作家。日本児童文芸家協会所属。現在、桜美林大学アカデミーで児童文学創作の講師をつとめている。
東京学芸大学卒業後、中学と高校で国語を教えながら児童文学の創作を志す。1969 年『風の花ぞの』で第 10 回講談社児童文学新人賞、1977 年『闇と光の中』（理論社）で第 10 回児童文学者協会新人賞、1989 年『ふるさとの山河を歌の心に』（PHP 研究所）で第 36 回産経児童出版文化賞推薦受賞。2017 年には児童文化の向上発展のための長年の努力・功績に対して児童文化功労賞を受賞。
著書に、前掲書のほか『つばさのかけら』（講談社）、『七本の焼けイチョウ』（くもん出版）、『羅生門』（金の星社）、『樋口一葉ものがたり』（銀の鈴社）など多数。

昨年、私は救世軍の若い夫妻が大活躍したパプアニューギニアでの様々な活動を取材し、それを、児童書のノンフィクションとしてまとめました。『友情の輪　パプアニューギニアの人たちと』（二〇一七年九月出版　佼成出版社）です。

思えば、本当に思いがけない偶然がきっかけで、救世軍とのご縁が生まれました。

その日、というのは今からもう五年前になりますが、私は父の遺稿を一冊の本にまとめてくれた出版社に行くため、東京神田の神保町の角にいました。約束の時間まではまだ、かなり時間があります。ふと思いついて、角に建っている救世軍本部の前のゴスペルハウス（PRコーナー）に入りました。様々な展示品にまざり、真っ先に目にとびこんだのは、若い夫妻が、現地の人たちと井戸掘りをしている写真と、夫人が現地の人と仲良く並んで歩いてくる写真です。屈託のない、その笑顔は私の心を強く捉えました。

「この人たちは何をしているところですか？」

ゴスペルハウスの担当者に、私は聞いてみました。

「井戸掘りです。JICA（国際協力機構）と手を携え、現地でこのように活躍しているのですよ」

それがこの時の答えでした。写真の女性のこぼれるような笑顔に惹かれ、私はしばし、その場から離れることができませんでした。そうして、これが私と、救世軍の活動を描いた今回の本を結びつけるもとになったのです。

「多くの国の人たちが支援のためにこの地に出かけます。でも、現地の人たちとはあまり馴染もうとせずに、仕事が終わると、あるいは何かを与えると、さっと引き上げるのが普通です。でも、この人たちは違いました。本当に現地の人たちの中に溶け込み、心から慕われもしたのです」

この一言も印象的でした。

今、日本に住む私たちは水道の蛇口をひねれば、さっと水が出てくるとても便利な生活をしています。多くの子どもたちに、もっと地球上の様様な暮らしを伝えたい。私は強烈に思いました。

この本の主人公―樋口潔さん、光世さん夫妻は、日本の救世軍から派遣されて、パプアニューギニアの衛生環境を改善するプロジェクトに携わりました。そこで、地域の人たちと良い関係を築き、そのプロジェクトを完遂しました。また、現地の救世軍の日曜学校で、子どもたちの先生として交流し、慕われたのです。

ところで、いわゆる文明が進んでいると言われる世界の子どもたちに、魅力を感じてもらう暮らしって何でしょう。このことが最初の疑問でした。

そこで樋口夫妻には、なるべく興味深く、日本の子どもたちにも好奇心で目を輝かせてもらえそうなエピソードを語ってもらうことにしました。

夫妻がまとめてこられたのは、以下のとおりです。

まず、小隊（教会にあたる）の日曜学校で海辺にピクニックに行っておこなった、パン食い競争ならぬスナック菓子食い競争やスイカ割りの話。大騒ぎで楽しむ子どもたちの姿は万国共通です。それから、日曜学校での聖書の暗唱の様子。目を輝かせ、懸命に取り組むその姿もまさに万国共通のものだと思いました。

〈これらは、ぜひ書かなければ〉そう私は思いました。

驚いたのは、鶏を飲み込んだ四メートルに近い大蛇を村人総出で捕まえ、全員で消化されずに残っていた鶏ごと山分けして食べたという話です。様々な取材に慣れているとはいえ、まだ実際に大蛇は見たこともないし、まして食べたことなどありません。ここをどう描くか、途方にくれました。すると、樋口夫妻の上司で第一次プロジェクトに参加した那倉基夫さんが、

「良かったねえ、久しぶりに良質の動物性蛋白質にありつけて。そんな気持ちだったんじゃないですか」

と言われたのです。

〈ああ、これだっ！〉そう私は思いました。

考えてみるなら、私たちは牛肉や豚肉を食べます。村人たちが大蛇を食べてどこがおかしいでしょう。目から鱗の

心境でした。乏しい蛋白源の中、大蛇を分け合う。とても人間的です。私はこの部分を食習慣の違いと捉え、そのように描くことにしました。

感動的だったのは、子どもたちが日曜学校で暗唱聖句をするところ。

「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」（ローマの信徒への手紙12章15節）

この聖書の言葉を、一人の体の不自由な子どもが懸命に覚え、周りの子たちが応援するというくだりです。書いている私までが胸を熱くする、とても素敵な事件でした。

夫妻はまた、密林の奥深くの生活についても話してくださいました。そこは、夫妻の宿舎のある町から、でこぼこ道をトラックで三時間走った所にある村で、草を葺いた高床式の家々が点在し、そこで、人々の営みがおこなわれているのです。そのような所で、樋口夫妻は二年半という長きにわたって、彼らの生活環境改善に邁進しました。

まず衛生教育をして、地面に穴を掘っただけの排泄の習慣を変えてトイレを造り、次に雨水を溜め込むタンクを設置してきれいな水を得られるようにしました。しかも、現地の人たち自らがこれをおこない、アフターケアも自分たちでできるようにしたのです。これは、簡単なようでいて決して容易なことではありません。若い二人は、率先して働き、一つひとつ忍耐強く教えていきました。

さて、この本をまとめている間、私は大きな悲劇に見舞われました。今から三年前の九月、一人娘が四十六歳の若さで、天に召されたのです。新宿にある乳腺外科の医師による治療ミスでした。

「治る」

そう太鼓判を押され受けた乳癌の乳房温存療法が、二度目に多発性骨転移を起こし、あっけなく天へと召されていきました。

娘の葬儀は、キリスト教式でおこなわれました。娘が亡くなったその日、私たち家族―私、夫、孫、そしてまだ体が温かい娘―はキリスト教の洗礼を受けていたのです。葬儀には、編集者だった娘と親交のあった方々が百人以上も参列してくださいました。

娘の死は、本当につらい試練でした。私は髪が真っ白になってしまいました。その後、一年くらいは放心状態でした。自分の中にあるすべての感情が死んだようでした。ただ、必死で娘の遺した孫の面倒を看ていました。一昨年の暮ごろ、やっと立ち直ることができました。ここにいたる〝人生の谷〟の時、この本『友情の輪～』ができあがっていったのです。

娘が亡くなった後、私は二度、神を身近に感じました。一度目はまだ誰も来ていない朝の礼拝堂に、『讃美歌』三〇番「あさかぜ　しずかにふきて」が流れていた時です。

「ああ、娘は天に昇り、今、神にお仕えしている」

私はそう思い、しばしその場を動くことができませんでした。

もう一度は、やっと小学生になった孫が、校帽をかぶり、ランドセルを背負い、元気に出かけて行く後ろ姿を見ていた時でした。

「香緒里、ミーちゃんは元気よ。ずっと私が育てるから、あなたも見守ってやって」

亡き娘に、私は自分の決意を伝えていました。

考えてみると、私の祖父は僧籍。したがって、身近に僧が大勢います。キリスト教に帰依しようと心に決めたのは、その教えに心に響くものがあったからにほかなりません。

もともと元気だった頃から、娘の気持ちは、キリスト教に傾いていました。娘の知り合いにジャーナリストで牧師になった方がいて、娘はその方にいろいろ話を聞いていたのです。ただ、その方の教会が広島県の尾道と遠方だったため、入信することには、抵抗もあったようです。娘の病が重くなった頃、私どもでは家の近くの教会を紹介していただきました。それが、今、私が行っている教会でした。

教会の牧師夫妻は、私たちの事情をよく理解され、娘や私に信仰の道を説き、娘亡き後も何かと心にかけてくださっています。私が階段から落ちて圧迫骨折した時も、救急車を呼んでくださったり、いろいろお世話してくださいました。今、私は日曜ごとに教会の礼拝に出、聖書の御言葉から養われる生活を送っています。

思うに、信仰とは、静謐の中に身を置き身も心もその中で高められていく、そういう自分と向き合える一瞬にあるのかもしれません。

私自身がその中に身を置き、静かに祈りの時を迎え、ひたすらに祈り続けることなのではないでしょうか。

現在、私は八十歳ですが、大学の社会教育のほうで、児童文学の講義を受け持っており、ある出版社で企画した短編集の公募作品の選者にもなっています。私自身も、まだまだ書きたいことがたくさんあります。子どもたちのために良い本を出していかなければ、と思っています。そして、孫の成長を楽しみに、娘と共に生きていきたい、と願っています。

（ニューホープ国際基督教会 清瀬けやき通りチャペル 所属）

救世軍の海外支援
～パートナーズ・イン・ミッション

世界中の救世軍は、それぞれの国での課題や困難に対する働きを進めていますが、国ごとにパートナー国が定められ、様々な面で祈り合い、支援し合っています。

☆日本のパートナー国

日本の救世軍は、昨年からバングラデシュ、カナダ、バミューダ、※ラテンアメリカ北部、リベリア、シエラレオネ、マラウイの各国とパートナーになっています。

（※コロンビア、コスタリカ、キューバ、ドミニカ共和国、エルサルバドル、グアテマラ、ホンジュラス、ニカラグア、パナマ、ベネズエラ）

ハリケーンの被災者を訪問（キューバ）

☆各地の支援活動

○シエラレオネ

昨年八月、首都フリータウンを中心に、大雨による大規模な地すべりが起こり、四百人近い人が命を失い、約六百人が行方不明になりました。救世軍は、他のNGOと協働して、食事や調理用具、毛布などを提供しました。

○バングラデシュ

今年一月、観測史上最も低い気温二・六度を記録し、死者も出たため、政府による毛布の配布に加えて、救世軍では、街頭での生活を余儀なくされている人々を訪ね、声をかけながら、毛布を配布しました。

キリトリ

□私の近くの救世軍を紹介してください。
□キリスト教についてもっと知りたいです。
□『ときのこえ』の購読を申し込みます。

ご氏名

ご住所

この部分を封書か葉書に貼り、裏面下の救世軍にお送りください。

救世軍克己週間募金に（3月～4月）

皆様のご協力をお願いいたします

救世軍では、毎年、克己週間という募金の期間を設けています。これは、今から130年近く前、ヨーロッパに救世軍の働きを広げるための資金が必要になり、創立者のウイリアム・ブースが「それぞれ1週間だけ何かを節約（克己）して、その分のお金を献げよう」と呼びかけたことに端を発しています。以来、毎年、世界の救世軍で支援を要する人々のために募金がおこなわれるようになりました。

現在、世界中の救世軍で集められた寄付金は、イギリスの国際本部に送られ、救世軍の国際的ネットワークを通じ、開発途上国や災害被災地、難民の支援などのために役立てられています。（関連記事３ページ）

寄付金は以下の方法でご協力をいただいています

●**戸別訪問**
制服を着用した伝道者や信徒が伺い、趣旨を説明して寄付金をいただきます

●**郵便による送金**
郵便振替
口座　00180－5－4400
加入者名　救世軍本営
現金書留
〒101－0051
東京都千代田区神田神保町２－17
救世軍本営
※どちらも、「克己週間募金」とお書きください

●**インターネットによる送金**
救世軍ホームページ
http://www.salvationarmy.or.jp
※海外支援（克己週間募金）を選択してください

▷**お問い合わせは、救世軍本営 伝道事業部まで**
TEL 03-3237-0881

救世軍とは

The Salvation Army

国際的な組織のキリスト教会（プロテスタント）で、世界百二十八の国と地域で働きを進めています。

一八六五年、イギリスの牧師ウイリアム・ブースが、東ロンドンの貧しい人々、虐げられている人々に神の愛を届けようと伝道を始めました。やがて、人々の一番必要としているものを提供しないで神の愛を伝えることはできない、と物心両面からの救いを目指すようになり、医療や社会福祉の働きが起こされてきました。そして、その時々の人々のニーズに迅速に応えるため、軍隊流の組織を取り入れ、アルコール依存症者の回復支援をおこなっている団体として、信徒もアルコール抜きのライフスタイルを採りました。

日本での働きは、一八九五（明治28）年に始まりました。廃娼運動や失業者対策を推し進め、結核療養所や婦人保護施設、児童養護施設の設立などに力を尽くしました。また、キリスト教、聖書の神をわかりやすく伝え、多くの人々が真の神を信じるようになりました。

現在は、伝道の拠点である四十三の小隊（教会にあたる）と十二の分隊（伝道所にあたる）、十九の社会福祉施設、二つの病院（ホスピス併設）を通して働きを進めています。

年間を通して、街頭生活者支援や災害被災者支援、様々な社会奉仕活動をおこなっていますが、これらは、社会鍋募金などを通して献げられた寄付金を資金としています。

国際組織の救世軍は、世界の各地において、様々な災害被災者への支援と共に、内戦などからの復興支援、開発途上国での職業訓練、教育の充実などによる自立支援、ＨＩＶ／エイズ対策プログラム、トラフィッキング（人身取引）対策などにも力を尽くしています。それらの働きは、世界の救世軍で募金を呼びかけ、特に「克己週間」募金などで集められた寄付金によっておこなわれています。

必要とされる働きは、国や地域の状況に応じて異なりますが、救世軍のすべての働きは、キリストの愛に基づき、人種や思想を超えて人々に仕えるためのものなのです。

昨年９月に２度の大地震を経験したメキシコでは、各地の避難所に食事を届けた

NEW YORK STAFF BAND

世界最高峰の救世軍金管バンド
ニューヨーク・スタッフ・バンド
いよいよ、来日！

３月 20 日（火）	19:00 ニューヨーク・スタッフ・バンド・コンサート in 大阪
21 日（水・祝）	10:15 大阪 賛美と喜びのつどい（救世軍・大阪セントラルホール）
22 日（木）	18:30 第２回 救世軍チャリティーコンサート「子どもたちの未来のために」
23 日（金）	18:00 ニューヨーク・スタッフ・バンド・コンサート in 東京
24 日（土）	11:30 千代田区ブラスフェスに参加 、パレードもあり
25 日（日）	10:30 東京地区連合聖別会（日本教育会館・一ツ橋ホール）

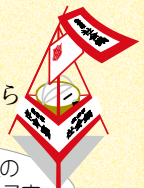
お問い合わせは、救世軍本営 ＮＹＳＢ2018ツアー事務局（03-3237-0838）へ

映画『地の塩 山室軍平』

新潟・新潟シネ・ウインド
～３月９日（金）
順次 仙台、広島で公開予定

山室軍平　日本人最初の救世軍士官（伝道者）の生涯と、日本における救世軍の草創期が描かれている。

第2回 救世軍社会鍋俳句コンテスト



受賞式は、６月開催の創立記念コンサート席上を予定。ふるってご応募ください

◆募集内容：社会鍋を題材にした未発表作品、一人２句まで
◆応募方法：郵送（ハガキ不可）、ファックスでの送付、救世軍ホームページ応募フォームから
◆締め切り：３月 31 日（消印有効）
◆賞　　：優秀賞１句、特別賞２句、ほのぼの賞３句
◆結果発表：『ときのこえ』６月１日号紙上、公式ホームページ
◆選　　者：三浦喜代子氏〔日本クリスチャン・ペンクラブ代表〕他
◆送り先、問い合わせ先：〒101－0051　東京都千代田区神田神保町２－17　TEL 03－3237－0881
救世軍本営「救世軍社会鍋俳句コンテスト」係　FAX 03－3237－3588

▼発行日　毎月一日・十五日
▼定　価
一日号一部四〇円（〒六二円）
十五日号一部六〇円（〒六二円）
クリスマス特集号（十二月一日号）
一部一〇〇円（〒七〇円）
振替・〇〇一八〇－五－四四〇〇

発行日及び定価
発行兼　救世軍
印刷人　代表者　ケネス・メイナー
編集人　寺澤　眞由子
〒101－0051　東京都千代田区
神田神保町二ノ十七
電話　東京(03)三二三七－〇八八一
発行所　救世軍本営
印刷所　図書印刷株式会社

（取扱支部）

救世軍は、統一協会、エホバの証人、モルモン教ではありません。これらの問題でお悩みの方は、右救世軍にご相談ください。

（この欄に通信文を書くと第三種扱いになりません）

聖書は新共同訳を使用しています　©共同訳聖書実行委員会 ©日本聖書協会